

天の水と地の水

ヨハネ1章29-34節

その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を受けに来た。」そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を受けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」

説教

ヨハネの福音書の特徴のひとつに「日時へのこだわり」があります。そこに（日時に）注目してみます。ヨハネ福音書の一章には3回ほど「その翌日」がでてきます。きょうの朗読部分は「その翌日」の一回目です。最初の日を月曜日と仮定するときょうの朗読部分は火曜日にあたり、水曜日（1:35）、木曜日（1:43）と続きヨハネの一章は終わります。そして二章の冒頭はこう始まります。

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。ヨハネ2:1
一章からの続きで数えて金、土、日と、三日目は日曜日に当たります。この解釈でいけば2章の「カナの婚礼」は日曜日の出来事です。

「初めに言があつた」で始まるヨハネ福音書は「初めに、神は天地を創造された」ではじまる創世記1章の天地創造の7日間を思い起こします。その類

似からヨハネ福音書の7日間とも呼ばれています。

創世記の2日目（創世記 1:6）はこう記されています。

神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。創 1:6-8

神は二日目に大空を天と呼び、水を天の上と下に分けたとあります。

きょうの朗読でバプテスマのヨハネは自分は水で洗礼を受けているが、聖霊で洗礼を受けるお方がいると預言し、イエスを目撃して「神の子羊」と呼び聖霊で洗礼を受けるお方だとあかししています。

また、ヨハネの証言によれば神がヨハネを派遣した目的は「水の洗礼」をさせるため、それは創世記の第二の日でいうところの「天の下」の水を使つての洗礼でした。その解釈でいけば「聖霊による洗礼」とは「天の上の水」での洗礼ということができます。

「天の下の水」とは「ふつうの水」でしょう。「天の上の水」はふつうとは違う水だろうなと想像できます。ヨハネ福音書の4章ではイエスとサマリアの女との水問答があり「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。ヨハネ 4:14」とふつうの水ではない水についての説明をイエスがおこなっています。

ヨハネ福音書冒頭で語られる「水」を創世記で語られる天地創造をとおして見ると、バプテスマのヨハネの本気の「水」そして、それを受けてイエスが語る本気の「水」（ヨハネ 2、3、4、5章参照）の迫力がわたしたちにも伝わってきます。

礼拝では儀礼として「水」を取り扱いますが、礼拝儀礼をこえて普段の生活の中でも聖書が教えてくれる「水」を意識することができますように。
